

東京外国語大学附属図書館第17回特別展示

旅するチベット語 — 縁は異なるもの文字は乗り物



『衛蔵図識』より西チベットの女

言葉は声や文字に乗って思いもよらないところに旅をします。チベット語も1300年前に文字を持って以来、旅を続け、異文化との邂逅を果たしてきました。いにしえの人々が言葉に託した思いは、文字という乗り物に乗って、また時には翻訳という変換を通じて、時空を超えてわたしたちのもとに届けられるのです。

本展示では、そうした旅を辿る資料—チベットで初めて編纂された辞書や18世紀ローマで印刷されたチベット文字教則本、文学作品に至るまで—をご覧ください。ほんのひととき、言葉と文字の旅路の妙に思いを馳せてみませんか？

平成28年11月21日(月)–12月26日(月)

会場：東京外国語大学附属図書館2階ギャラリー

選書・解説執筆：星 泉（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

1. 記録の中のチベット (展示ケース1)

チベットの隣国である中国は、あらゆる出来事を文字で記録してきました。異国として異民族とその文化のことも丹念に記述し、正史をはじめとする様々な書物に記録を残しています。チベットについては、唐が滅びた後に編纂された『唐書』に記述が見られます。また、清代には詳細なチベットの地誌も編纂されています。

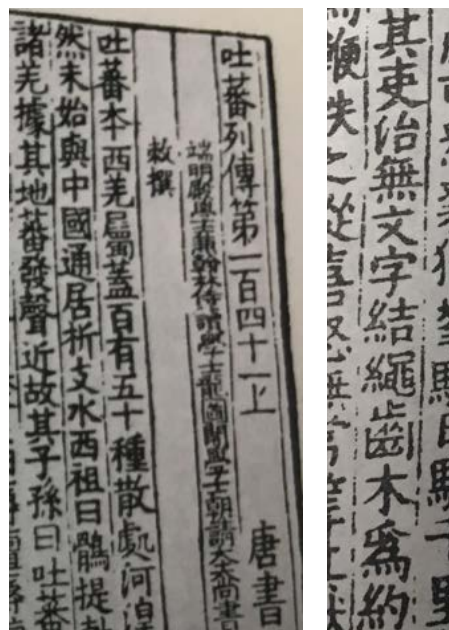
(注) 本解説においては、チベット文字はローマ字転写で、漢字は日本語の漢字で示しています。

中国の正史の中に現れたチベット (展示資料1-1)

五代十国の後晋の時に編纂された『旧唐書(くとうじょ)』と宋代に編纂された『新唐書』のいずれにも、「吐蕃列伝」が収録されています。「吐蕃」とは、当時の中国によるチベット帝国 (7-9世紀) に対する呼称です。写真左は『新唐書』の吐蕃列伝冒頭部分です。右は、「その行政には文字を用いず、縄を結び、木に刻みを入れて約束をする」と記されています。唐代には既にチベット文字は存在していましたので、「政治上の契約を文字で交わさない」という意味だと思われます。

ちなみに、チベット人は「口頭での誓い」を重要視します。現在でも中国とチベットの習慣の違いを表すのに「中国人は文書を重んじ、チベット人は言い交わしを重んじる」ということわざが使われているほどです。

なお、吐蕃列伝は『騎馬民族史 3 正史北狄伝』(羽田明・佐藤長他訳注、平凡社、1973年) に収録されています。(請求記号 A/222/77/3)



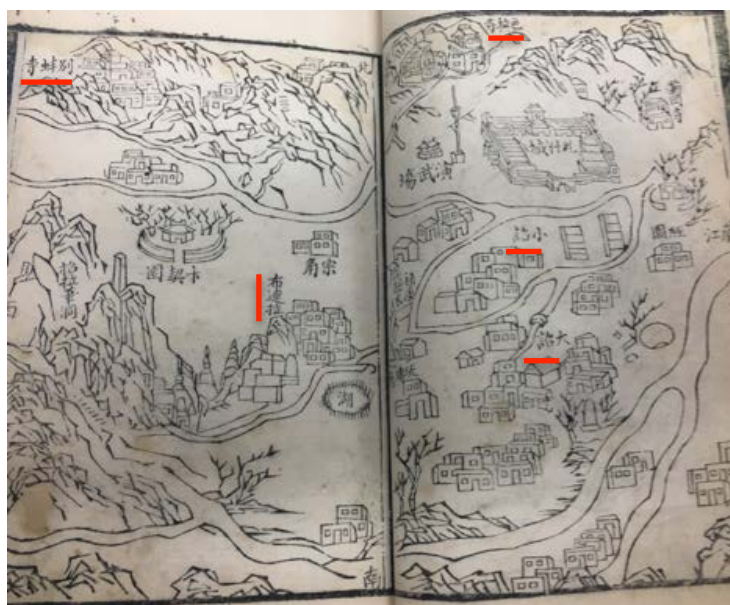
写真は台湾商務印書館刊『新唐書』

18世紀のガイドブック『衛蔵図識』(展示資料1-2)

『衛蔵図識(えいざうずしき)』の「衛蔵」とは、チベットの都ラサを中心としたウー(衛)地方と、その西側に広がるツァン(蔵)地方を合わせた中央チベットを表す「ウー・ツァン」地域名称の漢語表記です。清の乾隆帝の時代に編纂されたこの本では、四川の成都からウー・ツァンに至る道程が地図や地名とともに示されている他、東チベットから西チベットに至るまでの各地の地誌が詳しく記されています。ここではその一部をご紹介します。

《ラサの地図》

チベットの都であり、仏教の聖地としても名高いラサについては比較的詳しく記されています。ここに挙げたのはラサとその周辺の寺社仏閣の地図です。右頁中央の「大詔」はソンツェン・ガンポ王(581/617-649)の時代に建立されたチョカン寺、そのすぐ上の「小詔」はラモチェ寺です。左頁中央の「布達拉」は世界遺産にも登録されている「ポタラ宮」です。左頁左上の「別蛙寺」はデプン寺、右頁上の「色拉寺」はセラ寺です。この地図が描かれた時代にはそれぞれ数千人の僧侶を擁する大学問寺でした。



《チベット各地の民族衣装の記録》

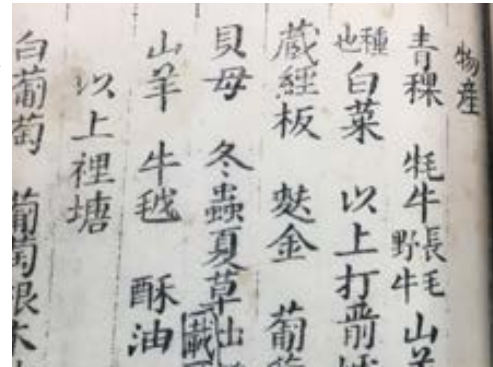
各地の普通の人々の姿が絵で記録されているのもたいへん興味深いものです。紙幅の都合で全てをお見せすることはできませんが、東チベットのタルツェンドやバタン、リタン、そして西チベットのガリー地方などの男女の姿がそれぞれの民族衣装とともに描かれています。写真は左2枚がリタンの女性と男性、右2枚がガリーの女性と男性の図です。



《チベット各地の産品の記録》

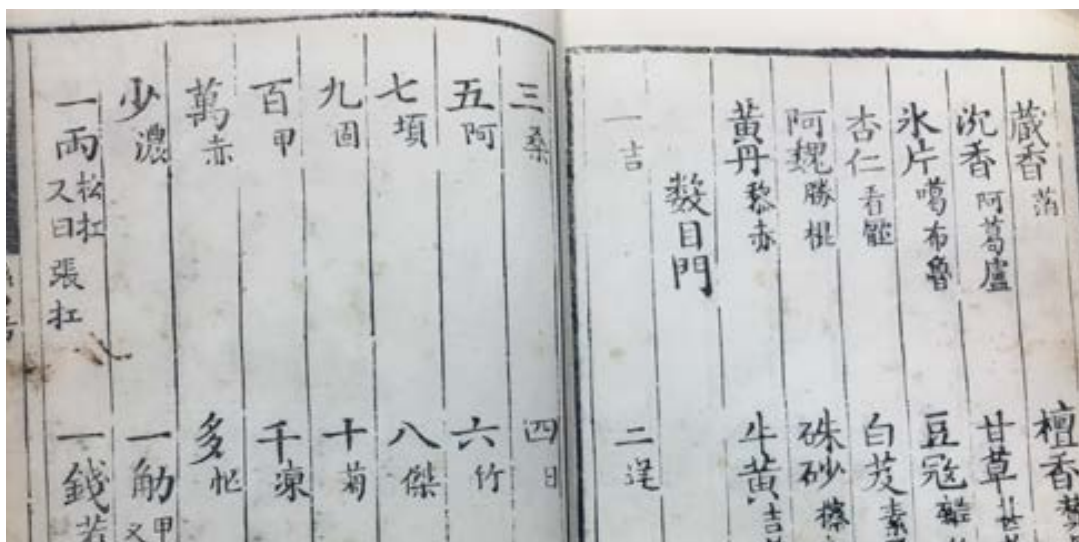
各地域の主要産品も記録されています。ここはタルツェンドとリタンの産品がそれぞれ記されている箇所です。ハダカムギ、ヤク、山羊、バター、白菜、葡萄などが目につきます。

リタンの産品の中に「蔵経板」がありますが、これは経典を印刷するための版木のことです。リタンでは17世紀に大蔵経が印刷されており、これはチベット内部での大蔵経の木版印刷としては最も早い時期のものとなります。漢方薬として高値で取引される「冬虫夏草」の名も見えます。



《チベット語の基礎語彙集》

巻末にはチベット語の基礎語彙集が収録されています。天文、地理、時、人物、身体、建造物、道具、飲食、衣服、色、仏教、文書、方角、植物、鳥獸、宝石、生薬、数字、出来事などに分類され、単語とその発音が掲載されています。右下に少し小さめの文字で示されているのが発音表記です。例えば、ここに示した「数目門」の最初は数詞の「一」で、その発音は「吉」とあります。チベット語の発音は「チッ」あるいは「チー」という発音であり、その音に近い漢字が記されています。



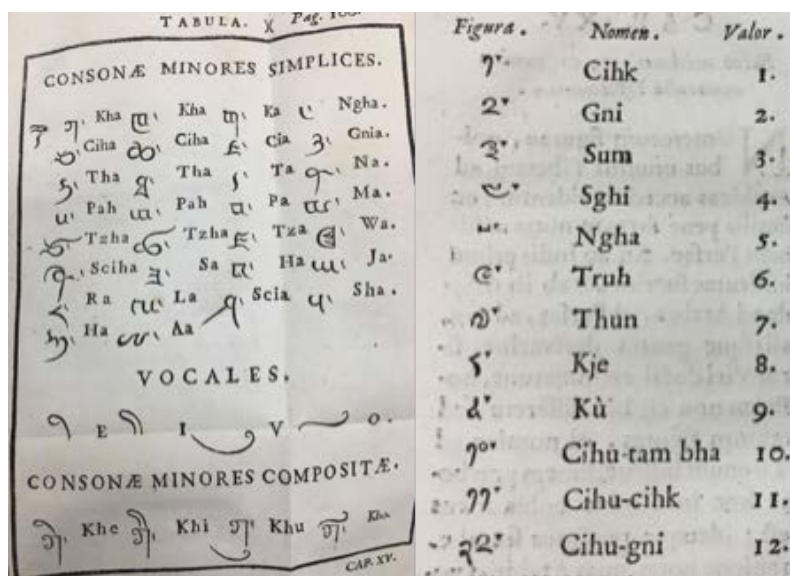
2. ヨーロッパや日本からのまなざし (展示ケース2)

ヨーロッパの人々もまた、チベットに関する記録を残しています。初めてチベットを訪れたヨーロッパ人は、14世紀のイタリア人旅行家のオドリコですが、その後、17世紀から18世紀にかけて、カトリック教会のイエズス会やカプチン会の宣教師が布教を目的としてチベットを訪れるようになります。キリスト教の布教は成功したとは言えませんでした。現地の言葉での布教を目指した宣教師たちは、聖書をチベット語に翻訳することを目標としてチベット語の辞書や文法書を作り、結果的にヨーロッパにおけるチベットへの関心が大きくなるきっかけとなりました。

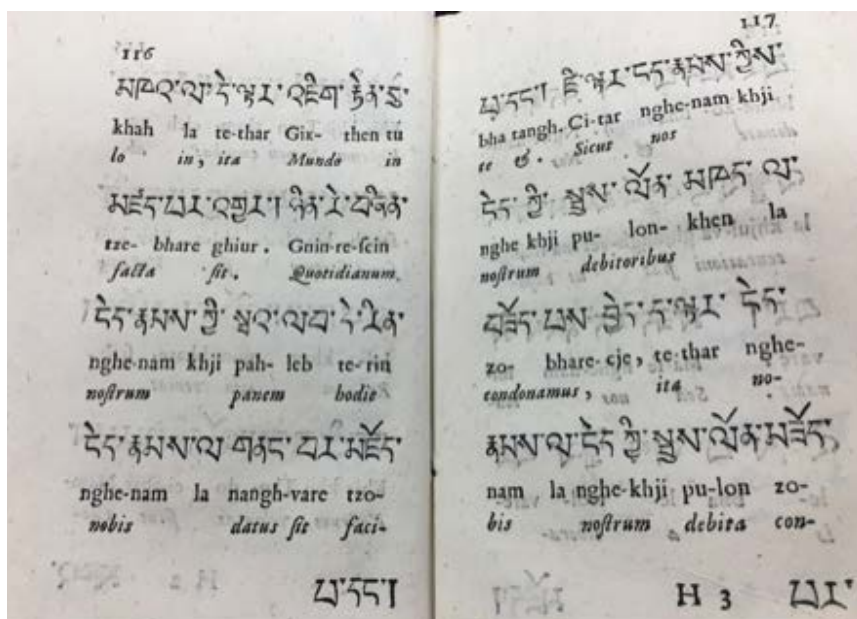
一方、日本では仏教のルーツを学ぼうとチベットへ旅立った若き僧侶たちがいました。そのうちの一人、河口慧海は日本に帰国してから文法書を著しています。

18世紀のローマの活版印刷とチベット語 (展示資料2-1)

宣教師たちは、現地の言語の理解につとめ、教則本の出版、祈祷書の翻訳などを進めました。ここに展示した小さな本は、*Alphabetum Tangutanum sive Tibetanum* 『タングートあるいはチベットの文字』で、チベットを訪れたことのある宣教師カッシアーノ・ベリガッティ (Cassiano Beligatti, 1708–1791) によって編纂されました。チベット文字はローマで鋳造された、最も早い金属活字です。写真左はチベット文字の基字と母音記号、右はチベット数字と発音を示しています。



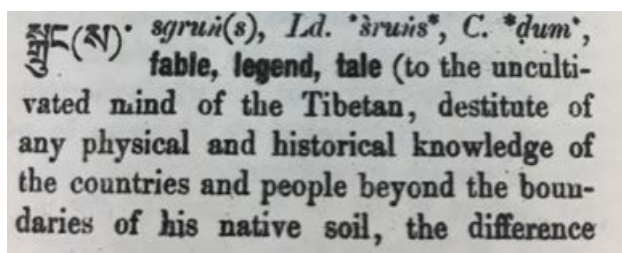
また、下の写真は有名な祈祷文「主の祈り」のチベット語訳が掲載されたページです。各行の1段目にチベット語の祈祷文、2段目に発音、3段目に単語の逐語訳がラテン語で表記されています。よく読んでみるとあまりこなれていないチベット語で、翻訳に苦心した様子が見て取れます。



ドイツ人イエシュケによる本格的なチベット語辞典 (展示資料2-2)

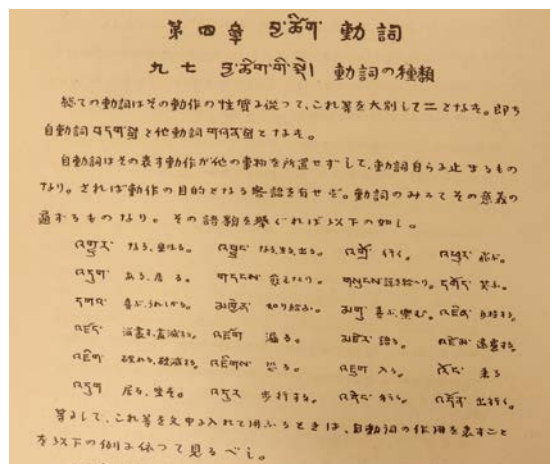
ドイツのモラヴィア兄弟団の宣教師であったハインリヒ・アウグスト・イエシュケ (Heinrich August Jäschke, 1817–1883) は布教のために西チベット (現在のインド・ヒマーチャル・プラデーシュ州) に派遣されます。そこで12年にわたってチベット語を学び、布教のための書物のチベット語への翻訳に勤しみます。帰国後に『新約聖書』をチベット語に翻訳するとともに、チベット語の辞書や文法書の編纂も行いました。ここに展示したのはイエシュケの辞書、*A Tibetan-English dictionary with special reference to the prevailing dialects* 『チベット語英語辞典—諸方言に着目して』です。外国人の作った辞書の中で、世界で最も長く使われているチベット語の辞書です。後世の辞典編纂にも大きな影響を与えました。最初ドイツ語で書かれ、後にイエシュケ自身によって英語に翻訳されたものです。ここに展示したのは、1934年版です。

この辞書の素晴らしい点は多々ありますが、そのいくつかを挙げれば、有名な古典から例文を多数引いていること (数々の古典を精読したであろうことが推察されます)、解釈に自信がないところに正直に疑問符が付されていること、さらには西チベットと中央チベットの方言が示されていることなどがあります。例えば、右の「物語」を意味する項目の説明には、1行目にラダック語であることを意味する *Ld.*、中央チベット語であることを意味する *C.* という記載があり、それぞれの後に発音が書かれています。



使い込むほどにイエシュケの言語に対する鋭い観察眼に感服させられる辞書です。

河口慧海のチベット語文法書 (展示資料2-3)



20世紀初頭にチベットを二度訪れた河口慧海 (1866–1945) は、その体験記を新聞に連載した『チベット旅行記』で有名ですが、ここに展示した『西藏文典』(大東出版社、1936年)という文法書も著しています。チベットの伝統的な文法教育のスタイルを日本語に移しつつ、日本語の文法用語をチベット語の文法用語と対照させながら説明した文法書です。日本語もチベット語も丹念に手書きしているのが印象的です。

20世紀初頭にチベットを訪れたチベット学者、寺本婉雅 (1870–1940) も、チベット語の文法書『独習実用西藏文典』(平楽寺書店、1940年)を著しています。こちらは活字印刷です。

チベット語の辞典編纂の歴史については『世界のことば・辞書の辞典 アジア編』(石井米雄編、三省堂、2008年)の「チベット語の辞書」をぜひご覧ください。(請求記号 A/813/641748/1)

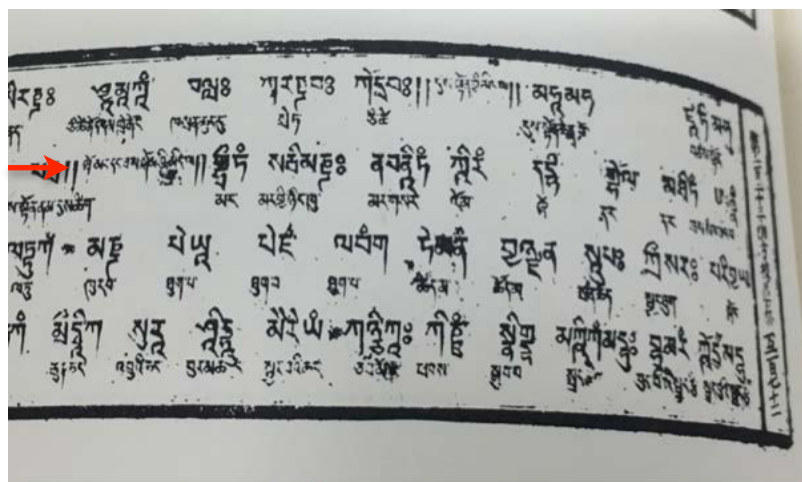


3. 周辺の国々との関わりの中から生まれてきたもの (展示ケース3)

チベットはインドやネパール、モンゴル、中国などの周辺の国々と政治・経済的な関わりはもちろん、宗教的、文化的な関わりを常に持ち続けてきました。その中で生み出された書物を紹介します。

インド仏教の受容と辞典編纂：『翻訳名義大集』 (展示資料3-1)

チベットに仏教が本格的に入ってきたのは、8世紀頃のことです。8世紀末には仏教はチベット帝国の国教とされ、サンスクリットで書かれた仏典のチベット語への翻訳が重要な国家プロジェクトとして推進されます。インドから大勢の僧侶が招かれ、チベット人僧侶と共同で翻訳が進められました。ここに展示したのはチベット人が編纂した最も古い辞書です。サンスクリットで書かれた仏典をチベット語に翻訳する際に、訳語を統一する作業が行われました。それがまとめられたものがサンスクリットーチベット語対照辞典、『翻訳名義大集』です。チベット大蔵経の論説部(テンギュル)に収録されています。ここに展示したのは、大谷大学所蔵北京版チベット大蔵経の影印本から該当部分を示したものです。



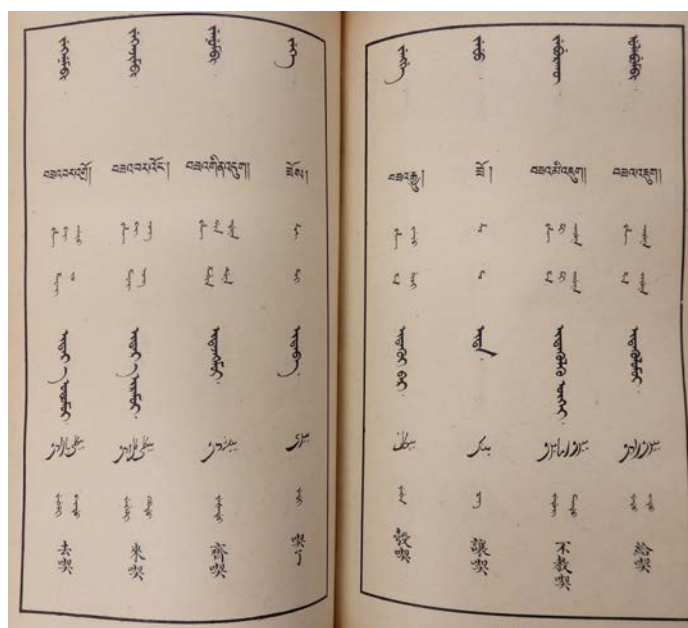
上段の大きめの文字がサンスクリットのチベット文字表記、下段の小さめの文字が対応するチベット語です。写真の矢印部分は乳製品に関する語が並んでいる箇所です。バター、バターオイル、新しいバター、ミルク、ヨーグルト、バターミルク……と並んでいます。

上段の大きめの文字がサンスクリットのチベット文字表記、下段の小さめの文字が対応するチベット語です。写真の矢印部分は乳製品に関する語が並んでいる箇所です。バター、バターオイル、新しいバター、ミルク、ヨーグルト、バターミルク……と並んでいます。

多言語社会を反映する五言語対照辞典：『五体清文鑑』 (展示資料3-2)

清代、乾隆帝の勅命により、満洲語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語、漢語の五言語対照の辞書が編纂されました。成立は1787年から94年頃、収録語数は2万語ほどです。天を表す言葉から始まる分類辞典となっています。各ページに4つ程度の項目が挙げられ、上から上記の順に各言語が表記されます。チベット語とウイグル語には満洲文字で発音が記されています。

単語のみならず、文末表現も収録されており、ここに示したページには「食へに行く」「食へに来る」「食へている」「食へた」「食へること」「食へる」「食へさせない」「食へさせる」といった表現が並んでいます。



清朝皇帝の乾隆帝や雍正帝はチベット仏教に傾倒していたことで知られています。詳細は『清朝とチベット仏教 菩薩王となった乾隆帝』(石濱裕美子著、早稲田大学出版部、2011年)をぜひお読みください。(請求記号 A/180/698556)

ラサで学んだモンゴル人僧侶が編纂したチベット語辞書

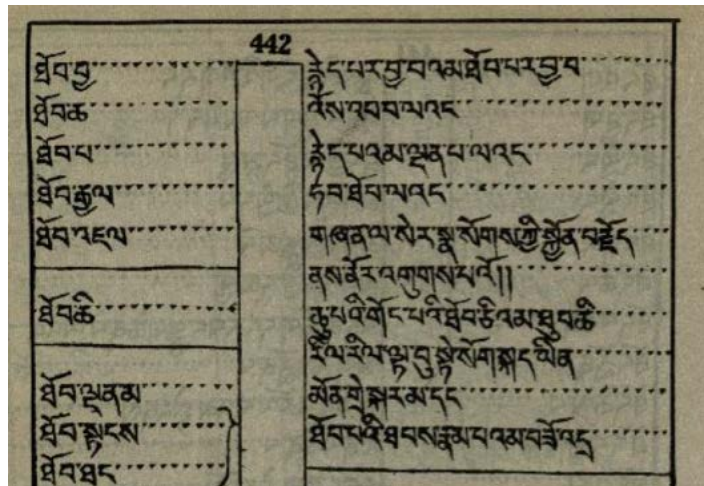
13世紀に急速に勢力を拡大したモンゴル帝国はチベットにも攻め入りましたが、同時にチベット仏教を信奉するようになります。チベットの僧院にはモンゴル各地から多数のモンゴル人が留学してくるようになり、その状況は20世紀前半まで続きました。

20世紀前半にラサのセラ僧院に留学していたブリヤート出身のモンゴル人ゲシェ・チューキ・タクパ (Dge bshes Chos kyi grags pa, 1897?-1972, ゲシェ・チューターという略称で知られる) はそうした僧侶の一人で、画期的なチベット語辞書 *Brda dag ming tshig gsal ba* 『蔵文辞典』を編纂したことで知られています。この辞書は、仏教用語の解説が詳しい一方、恐らく外国人として気になるチベット語の文末表現等を項目に取り上げています。また、外来語も丁寧に記録しています。画期的なのは、この辞書が木版印刷による洋綴じの本であるという点です。配列も、第1音節に限っては現代の辞書の配列と同じで、この点も新しいといえます。刊行は1949年です。この後ほどなくしてチベットは中国の支配下にのみこまれていきます。

展示しているのは1957年刊行の活版印刷版です。増補改訂が施されています。かなり大判ですが、後にコンパクトな版も出版されました。「6. 現代文学の幕開け」で紹介する作家トンドゥプジャの短編小説「ペンツォ」に出てくる『ゲシェ・チューターの蔵文辞典』はこの辞典のことです。

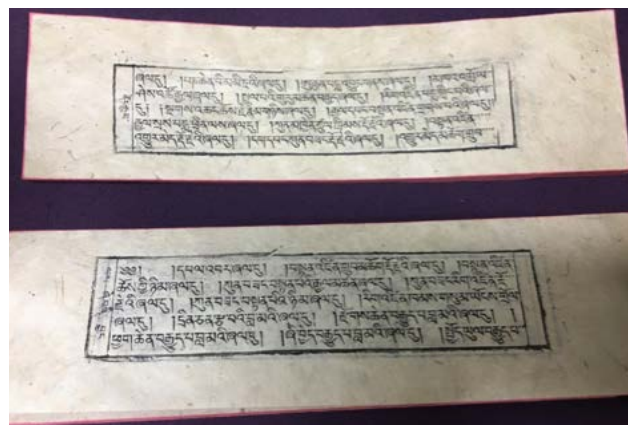


Tibetan Buddhist Resource Center のデータベースより転載
(<https://www.tbrc.org/#Irid=W1KG21089>)



チベット伝統の木版印刷

チベットには伝統的な印刷技術があり、自生する植物を用いた紙漉きと木版印刷の技術がチベット各地に伝わっています。右の写真のように横長の紙に裏表で印刷されます。印刷されたのは、もっぱら仏教経典でした。僧院で学ばれる膨大な仏教哲学の知識を下支えたのです。



チベットの印刷技術については『活きている文化遺産デルゲパルカン：チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』(池田巧・山中勝次・中西純一著、明石書店、2003年)をぜひお読みください。(請求記号 A/749/530643)

4. 活版印刷との出会い、そして試練の時代 (展示ケース4)

1949年に中華人民共和国が成立し、1951年には人民解放軍がラサにやってきます。1950年代後半になると東チベット各地でチベット人による武装蜂起が頻発します。ついに1959年にはラサで大規模な動乱が起こり、ダライ・ラマ14世はインドに亡命します。これをきっかけにチベットは中国に併合されることとなります。そして1966年から1976年まで続いた文化大革命の嵐はチベットにも吹き荒れ、革命の名のもとに僧院の破壊や經典の焚書が行われるなど、チベット文化は甚大な被害を受けたのです。チベット語にとっても厳冬の時代でしたが、そんな中でも、活版印刷の導入や翻訳による新しい概念のチベット語化が進んだことで、新しい未来に向けて模索する時代でもありました。

1950年代の新語策定事業：『漢藏新詞彙』 (展示資料4-1)

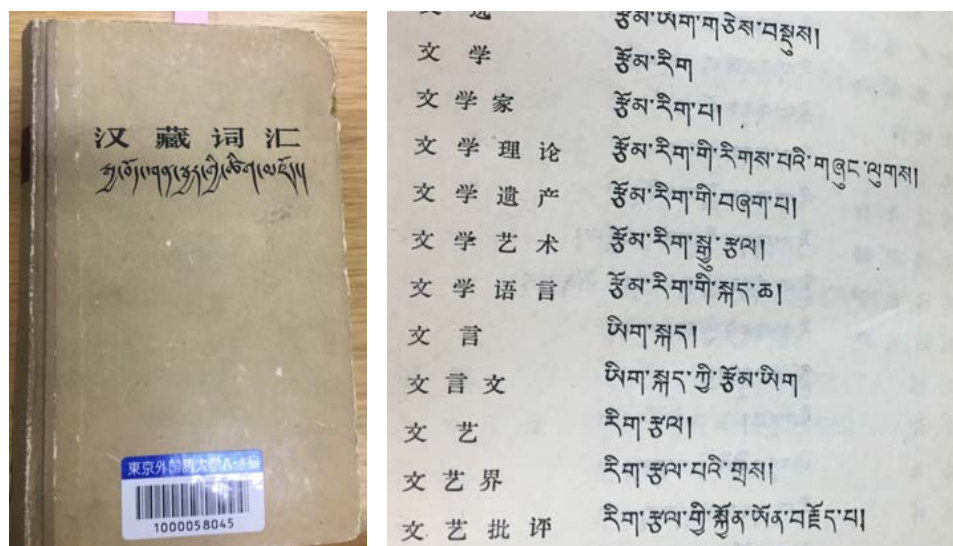
新しい概念の導入のためにチベット語の基礎研究が行われるとともに、新語の訳語策定が行われました。ここに展示したのは *Tha snyad gsar bsgrigs* 『漢藏新詞彙』(全4巻)、1954年から57年にかけて刊行された漢語—チベット語対訳辞典です。技術用語や思想用語などを表すチベット語が次々と決まってきました。

個人的な関心から「文学」という語の掲載されているページを取り上げます。ここで提案された「文学」に対する訳語 (yig rig) は後に疑義が出たのか、一般化しませんでした。



1960年代、中国語—チベット語辞典の正式出版：『漢藏詞彙』 (展示資料4-2)

上記の『漢藏新詞彙』をパイロット版として、正式な辞書として1964年に出版されたのが『漢藏詞彙』です。「文学」に対する訳語の掲載されたページを見ると、別の新たな訳語 (rtsom rig) が提案されています。この語が後に一般化し、現代に至るまで使われるようになります。

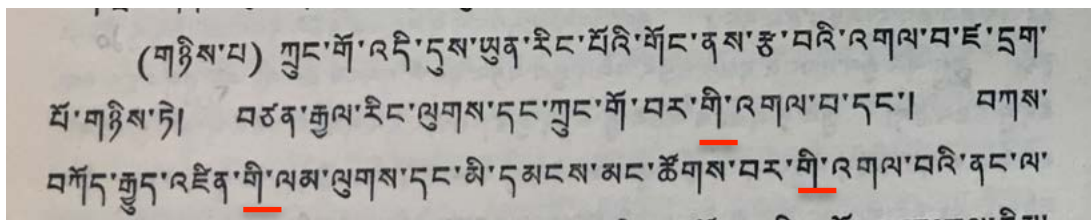
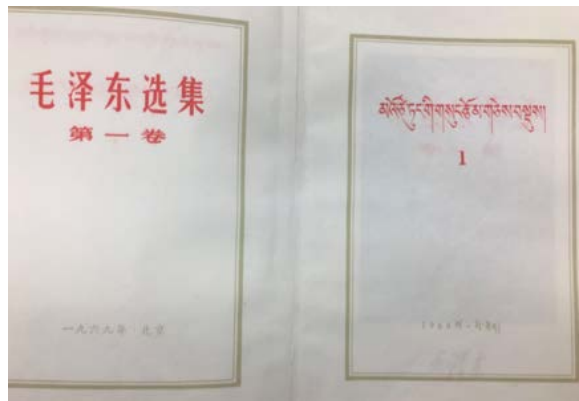


文化大革命の時代 翻訳！ 翻訳！ 翻訳！ (展示資料4-3, 4-4)

1966年に始まった文化大革命。この時代にはチベットの人々も毛沢東の言葉を暗唱させられました。策定された新語にもとづき、『毛沢東選集』のチベット語訳も急ピッチで進められました。植民地化の象徴ともいえる書物ではありますが、翻訳に携わった人々は当時のチベットの一般の知識人で、翻訳は優れたものとされています。

この選集の翻訳では、チベット文字の正書法改革の試みが行われました。属格助詞や能格助詞の表記を単純化するというものがその一つです。連声規則にもとづいて三種類に書き分ける必要のある綴り字を一種類にまとめてしまおうという改革案でした(下の赤線部分)。

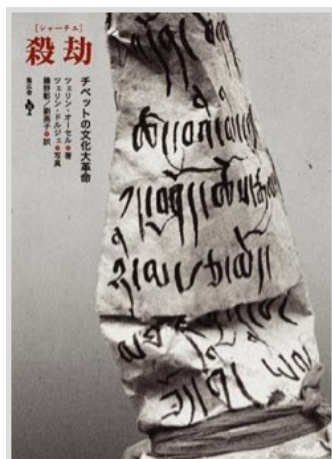
もっとも文革終了後の文化復興で一気に伝統的な正書法に戻りました。



古典文献の活版印刷 (展示資料4-5)

1950年代から1960年代前半にかけては、木版印刷の古典文献が続々と活版印刷されました。ここに展示したのは1957年に活版印刷された *Gzhon nu zla med kyi gtam rgyud* 『比類ない王子の物語』です。18世紀に書かれた古典文学で、格調高い散文と韻文で書かれた恋愛物語です。ちなみに、この物語はチベット語で書かれた初めての長編小説とされています。著者は大臣をつとめ、数々の著作を残したドンカルワ・ツェリン・ワンギェル (Mdo mkhar ba Tshe ring dbang rgyal, 1697–1763) です。文学好きの知識人たちは文化大革命の時代、農作業が暇になる冬などに、この本を繰り返し読んで心の抛り所としていたようです。

なお、展示しているのは初版ではなく、1979年に再版されたものです。



文化大革命の時代のチベットについて知るには『殺劫(シャーチエ)』(ツェリン・オーセル著、集広舎、2009年)がおすすめです。カメラマンだった著者の父ツェリン・ドルジェが撮影した当時の写真の数々は圧倒的な迫力です。(請求記号 A/222/658232)

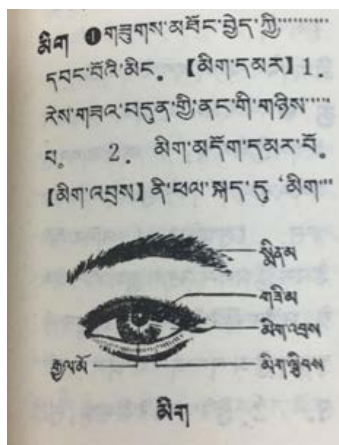
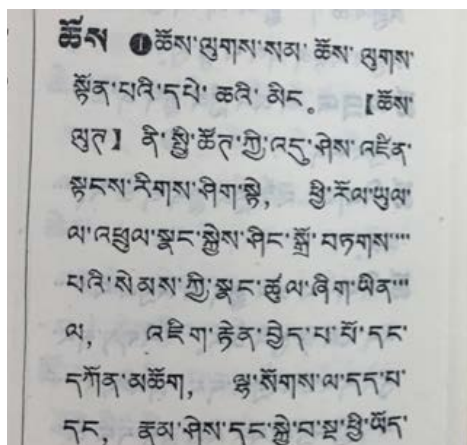
5. 文化復興の時代 (展示ケース5)

1976年に毛沢東が亡くなり、文化大革命は終焉を迎えます。鄧小平の主導による改革開放政策がスタートし、チベットの政治的・文化的状況も大きく変わっていきます。1980年代には破壊された僧院の再建もはじまり、文芸誌が続々と創刊されるなど、文化復興の時代が到来します。

次世代に贈るチベット語辞典 (展示資料5-1)

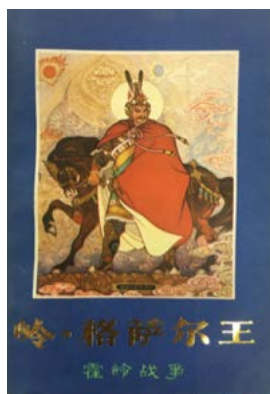
1979年には洪水のごとく多数のチベット語の書籍が出版されますが、ここに展示した *Dag yig gсар bsgrigs* 『新編藏文辞典』もそのうちの一冊です。収録語数は1万語未満と少なく絞り、語釈を充実させた中高生向けの学習辞典です。新華書店の辞典編纂方針を参考に執筆されたというその内容と記述スタイルは、当時としては非常に画期的で、人気も高く、ロングセラーとなっています。

文化大革命の最中に編纂が開始されたこともあり、記述内容には時代の影響が現れています。例えば、写真中央は「宗教」に対応する語の記述箇所ですが、「外界に幻想を抱き、虚構を生み出す精神作用であり…」のように否定的に書かれています。また、随所に「～は迷信である」といった記述が見られるのも特徴です。漢語式の句読点が用いられているのも当時の時代の産物と言えるでしょう。2014年に新版が出版され、記述は大幅に改められ、句読点もチベット式に変更されました。



口承文芸の書籍版出版ブーム：『ケサル王物語 ホル・リン大戦』 (展示資料5-2, 5-3)

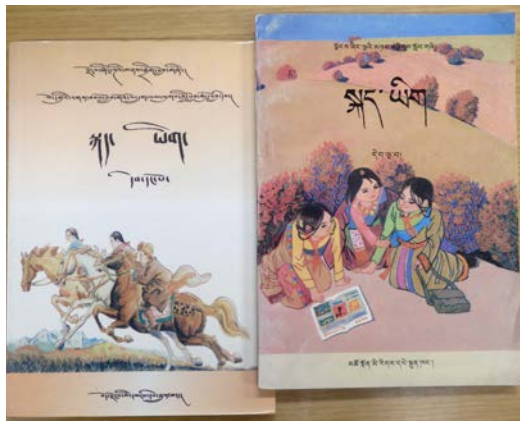
'*Dzam gling ge sar rgyal po'i sgrung* 『ケサル王物語』は語り部によって語り継がれてきた長大な英雄叙事詩で、チベットの人々の間で絶大な人気を誇ります。ここに展示したのは中でも人気の高い *Hor gling g.yul 'gyed* 『ホル・リン大戦』の巻の活字印刷版です。実は1962年に一度出版されたのですが、文化大革命がはじまり、『ケサル王物語』は語ることも読むことも禁止されました。1979年以降、ようやく再版され、多くの人々を熱狂させました。学校教育でチベット語を学んだ少年たちも夢中になって読んだそうです。語り部の活動も再開しました。漢語版もいち早く刊行されました。国家プロジェクトによる研究も盛んに進められています。写真右はチベット語版より戦闘シーンの挿絵です。



小学校の教科書『チベット語』（展示資料5-4, 5-5）

1980年代から学校教育も整備されていきます。当初は文字が読めるというだけで教壇に立たされた、にわか教師も多かったようですが、徐々に師範学校を卒業した若い教師たちが村々に送り込まれてくるようになります。

ここに展示したのは小学校の『チベット語』の教科書です。チベット人子弟の教育は、チベット自治区、青海省、四川省、甘粛省、雲南省という5つの省区にまたがって行われるため、1990年代から統一教科書を作る試みが進められました。方言差による語彙の違いや、地域による初等教育に対する考え方の違いから様々な対立やそれを乗り越えるための試行錯誤があったようですが、お互いに近づこうとする動きは極めて画期的なことでした。



子供向け新聞の創刊（展示資料5-6）



チベット各地でチベット語の新聞は刊行されていましたが、1989年には、子供たちがチベット語に親しめるようにと子供向けの新聞 *Gangs rgyan na chung tshags par* 『剛堅少年報』が創刊されました。漫画やクロスワードパズル、絵の描き方講座、世界の名画の紹介、小咄、詩、読者の投稿など、盛りだくさんの内容です。チベットで唯一の子供向け新聞です。毎月1日と15日に発行されます。

『唐書』吐蕃列伝チベット語訳（展示資料5-7）

1980年代の特筆すべき出版物として紹介したいのが、チベットの現代文学の黎明期の立役者の一人であるトンドゥブジャがチベット学者の陳慶英とともに翻訳した『唐書』吐蕃列伝の現代チベット語訳、*Thang yig gsar rnying las byung ba'i bod chen po'i srid lugs* 『新旧唐書に見られる大チベットの政治状況』です。

トンドゥブジャは1971年に北京の中央民族学院（現在の中央民族大学）に入学し、一旦ラジオ局で勤務した後、1979年には修士課程に進学し、チベット人として最初の大学院生となります。そこで教鞭をとっていたトゥンカル・ロサン・ティンレーの薫陶を受け、古代チベットの文学に強い関心を持って研究を進めました。

トンドゥブジャは吐蕃列伝の内容を散りばめながら、チベットの旧習を鋭く批判し、若者たちを鼓舞する「細い道」という散文を書いています。一部引用してみましょう。

—君たちは英雄たちが切り拓いた道を歩くことができるし、英雄たちの功績と名声を讃えさえている。だが彼らの革新の精神と賢明なる智慧は学ぼうともせず、あるいは学ぶ力もないまま、馬鹿の一つ覚えのように英雄たちの功績をぶつぶつと唱えるだけで何になるというのか—

チベットの若者に強い印象を与えたこの散文は「7. 翻訳でひろがる世界」で紹介する『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある』に収録されていますのでぜひ読んでみてください。



6. 現代文学の幕開け (展示ケース6)

チベットはあらゆる場面で「語る」力が重視されている土地柄です。文学面においては『ケサル王物語』をはじめとする様々な物語が、専門の語り部によってだけでなく、ごく普通の家庭においても語り継がれてきました。そうした豊かな物語文化を背景に、また、仏教と同じくインドから入ってきた韻文 (美文詩) というジャンルが時を経てチベット文化の重要な要素となったことも相俟って、散文と韻文を混在させたスタイルの小説、戯曲などの創作が行われるようになります。18世紀頃から、主に僧侶を書き手として作品が書かれるようになりました。

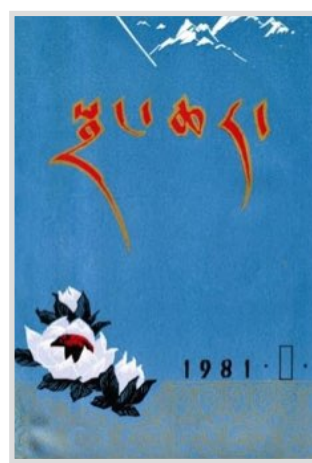
こうした古典文学は1950年代から60年代にかけて活版印刷されたことによって、当時の若者たちも手軽に読めるようになります。しかし、激動の20世紀に生きる若者たちにとって古典文学は古臭く映ったことでしょう。漢語を学んだチベットの若者たちは世界の様々な文学とも出会い、新しい文学を模索するようになります。現代チベット文学の幕開けです。

続々と創刊される文芸誌 (展示資料6-1, 6-2, 6-3)

文化大革命が終わった翌年の1977年にはラサで漢語による文芸誌『西藏文芸』(後の『西藏文学』)が創刊されます。このタイトルの意味するところは「チベットに関する文学」あるいは「チベットが舞台の文学」といったものでした。当初、作家の多くはチベットと何らかの関わりのある漢族でしたが、編集部としてはチベット族の作家に書いてほしいという強い願いを持っていました。そこでリクルートされたのが、チベット族と漢族のハーフで、都会で生まれ、普段は漢語名を使い、漢語教育のみを受けて育った若者でした。編集部は彼らの漢語小説をチベット名で発表するように指示します。後に『西藏文学』の編集長をつとめ、「チベット、皮紐の結び目につながれた魂」(展示資料6-1)などの魔術的リアリズムを取り込んだ作品を世に送り出して漢語読者の間で一躍時代の寵児となるザシダワ(チベット語風に言えばタシ・ダワ)がその一人です。

一方、チベット語の文芸誌の準備も進められ、1980年にはラサで *Bod kyi rtsom rig sgyu rtsal* 『チベット文芸』、1981年には青海省の西寧で *Sbrang char* 『ダンチャル』が創刊されます。1980年代には他にも続々と文芸誌が創刊され、チベット語で作品を書きたいと思っていた若者たちを大いに励ましました。もっとも創刊当初はチベット語で書ける人は少なく、『西藏文芸』に掲載された漢語作品をチベット語に翻訳したものが掲載されることが多かったようです。内容も、封建社会からの人民の解放をテーマにしたものが主でした。しかしそれも創刊後数年を経て大きく変わっていきます。

写真は左から漢語文芸誌『西藏文学』、チベット語文芸誌の西の雄『チベット文芸』と東の雄『ダンチャル』(創刊号表紙)です。



西のペンジョル、東のトンドゥブジャ (展示資料6-4, 6-5)

チベットの現代文学と一口にいても、作家の民族的・文学的バックグラウンドも含めて実は多様なのですが、ここではチベット人で、なおかつチベット語で書くチベット人作家に絞って話をしましょう。そうした作家の中で、現代文学の黎明期に大きな影響を与えた作家といえば、ペンジョル (写真左上) とトンドゥブジャ (写真右上) の二人をおいて他にいません。

ペンジョル (Dpal 'byor, 1941–2013) はラサの出身で、チベット語で初めて長編小説を書いた小説家です。その作品 *Gtsug g.yu* 『トルコ石の髪飾り』(写真左下) は『チベット文芸』に連載され、1985年に単行本が刊行されました。とある少年の成長物語を柱とし、20世紀前半のラサを活写したこの小説は、歯切れのよい端正なチベット語とともに多くの読者を楽しませました。当時、喫茶店など人の集まる場所ではこの小説の話題でもちぎりだったそうです。今でもこれを超える長編小説は書かれていないと言い切る人もいます。

トンドゥブジャ (Don grub rgyal, 1953–1985) はチベットの東北地方アムドの出身で、チベット語で初めて自由詩を書いた詩人・小説家です。『ダンチャル』に発表された *Langs tsho'i rbab chu* 「青春の滝」は伝統的な美文詩を踏まえた美しいレトリックの喚起する鮮烈なイメージと、そこに織り込まれた力強いメッセージによって多くの若者を熱狂させました。特にアムドでは彼の詩を暗唱する若者たちが続出し、みながこぞって真似をして自由詩を書きはじめたと言われています。鋭い社会批判の込められた小説も人気を博し、アムドにおける現代文学の隆盛の端緒を開きました。

どちらの作家も、チベットの古典文学に造詣が深く、かつ漢語 (インド留学の経験のあるペンジョルは英語も) を学んで様々な文学に触れた経験を持っています。古いものと新しいもの、その両方を武器に新しい時代を切り拓いたパイオニアなのです。

その後彼らに刺激を受けた若者たちが続々と作品を書くようになり、今や、1960年代生まれのベテラン作家から、1990年代生まれの新進作家まで、様々な作家・詩人が活躍しています。単行本も数多く出版されています。



チベット文学の多様性

チベット文学は、チベットの人々が置かれている環境の複雑さと呼応するように多様になっています。

チベット族であってもタクブンジャ (写真左) のようにチベット語のみで書く作家もいれば、ツェリン・ノルブやツェリン・オーセルのように漢語のみで書く作家、ペマ・ツェテン (写真中央) のようにチベット語と漢語の両方の



言語で書く作家、はたまた英語のみで書く作家もいます。民族的アイデンティティも様々で、ツェラン・トンドゥブ (写真右) やジャンブのようなモンゴル族 (数百年前にチベットに来て帰化したモンゴル人の子孫) もいますし、ザシダワや色波のような漢族とチベット族のハーフ、阿来のようなチベット族と回族のハーフの作家もいます。最近では女性作家たちの活躍も目立ってきました。

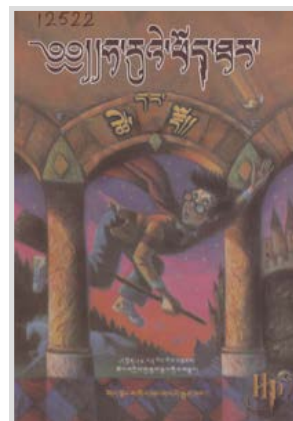
様々な言語や文字とともに私たちに届けられるチベットの声。近年、日本語で読める作品も増えてきましたので、ぜひ手に取ってみてください。

7. 翻訳でひろがる世界 (展示ケース7)

外国文学のチベット語への翻訳は、文芸誌の外国文学コーナーなどで少しずつ進められてきましたが、2000年代に入ると翻訳ものの単行本の出版が目立って増えてきます。チベットの人々が外国文学に触れる機会は、今でも漢語や英語を通じてであることが圧倒的に多いのですが、チベット語で直接読める作品が少しずつ増えているのは確かです。また、チベット文学の外国語への翻訳は古典文学を中心に従来から行われてきましたが、2000年代以降は現代文学が様々な言語に翻訳される機会が増えました。翻訳文学を通じてお互いの世界が少しずつ、静かにひろがっていくのを実感する、今はそんな時代のようなようです。

外国文学の翻訳 (展示資料7-1, 7-2)

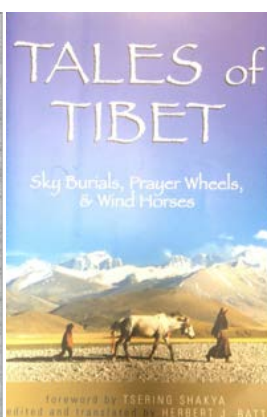
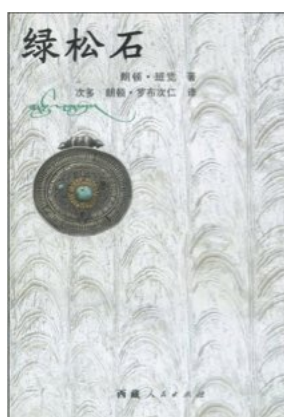
日本同様、ヨーロッパ文学は人気があり、ゴーゴリ、チェーホフ、トルストイ、デュマ、カフカ、クンデラなどの作品は漢語訳を通じて読まれてきました。魯迅や余華、またボルヘスやガルシア＝マルケスなども人気があります。一方で、2000年代以降、外国文学のチベット語訳が本屋に並ぶのを見かけるようにもなりました。『ロミオとジュリエット』(写真左) や『ハムレット』、『星の王子さま』(写真中央)、『椿姫』、また最近のものでは『ハリー・ポッター』シリーズ(写真右)も翻訳されています。日本文学では川端康成の『雪国』が最近チベット語に翻訳されました。



Tibetan Buddhist Resource Centerのデータベースより転載

様々な言語で読まれるチベットの現代文学

チベットの現代文学は、漢語をはじめ、英語やフランス語、ドイツ語、スウェーデン語、ポルトガル語、モンゴル語、日本語など様々な言語に翻訳されています。単行本として刊行されているものを紹介すると、左から、ペンジョルの『トルコ石の髪飾り』の漢語訳、漢語によるチベット文学作品の英訳、ペマ・ツェテンの短編集のフランス語訳、ツェラン・トンドゥプの短編集のモンゴル語訳です。いずれも2000年代以降に刊行されたものです。



日本語で読めるチベット文学 (展示資料7-3 ~ 7-9)

日本語で読めるチベットの現代文学としては、1991年という早い段階で出版されたザシダワと色波の短編を集めた『風馬の耀き』(牧田英二訳、JICC出版) だけでしたが、2010年代に入ると、翻訳紹介が急速に進みます。ラサの文学界の中心的人物であり、漢語のみで作品を発表するツェリン・ノルブの短編「アメリカ」が収録された『9人の隣人たちの声』(桑島道夫編訳、勉誠出版、2012年)、中国国内でも著名な、漢語で書く作家、阿来の長編『空山 風と火のチベット』(山口守訳、勉誠出版、2014年) が刊行されました。

そして、チベット語で書く作家たちに関しては、筆者も参加しているチベット文学研究会の翻訳が続々と刊行されています。いずれも現代チベットを代表する作家たちです。左からトンドゥプジャの詩と小説を収録した『ここにも激しく躍動する生きた心臓がある』、ペマ・ツェテンのチベット語と漢語の小説を収録した作品集『ティメー・クンデンを探して』、ラシャムジャの長編小説『雪を待つ』、タクブンジャの小説集『ハバ犬を育てる話』です。



どの作品もチベットの地やそこで暮らす人々への想像力をかき立てるものばかりです。ぜひこの機会に、関心を持った作品から読んでみてください。知られざるチベットへの旅を保証します。

なお、古くから親しまれてきたチベットの古典文学は日本語に翻訳されて読めるものもあります。本学の図書館にも所蔵されているおすすめの本を挙げましょう。

『ダライ・ラマ六世 恋愛彷徨詩集』(ツァンヤン・ギャムツォ著、今枝由郎訳、トランスビュー、2007年) (請求記号 A/9E3-8/T882)

『天翔ける祈りの舞 チベット歌舞劇 アチェ・ラモ三話』(三宅伸一郎・石山奈津子訳、臨川書店、2008年) (請求記号 A/9E3-9/636097)

『チベット仏教王伝』(ソナム・ギェルツェン著、今枝由郎監訳、岩波文庫、2015年) (請求番号 文庫/14/498-1)



『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』



最後に、チベットの芳醇な物語世界や文化を日本語で知ることのできる冊子を紹介します。文学と映画を中心に、他では読めない現地レポートがたっぷりです。文化の架け橋となる冊子として、チベットでも注目されています。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所リンディ事務局で無料配布中です。ご希望の方は下記ご参照の上、メールでお問い合わせください。

メール宛先：info-lingdy@aacore.net (リンディ事務局)

※メール本文にお名前、ご所属(外大生の場合は専攻語名と学年等)、ご希望の号数(例：SERNYA〇号希望)を明記の上、メールの件名は「SERNYA送付希望」としてください。

展示資料一覧

No.	編著者等	タイトル	出版事項	請求記号
1-1	欧陽脩・宋祁編	新唐書 第19冊	中華書局	B/222/695/19
1-2	馬掲・盛繩祖編	衛蔵図識	—	4.7/K4/W55/1~8
2-1	Cassiano Beligatti	Alphabetum Tangutanum sive Thibetanum	Sac. Cong. de Propaganda Fide, 1773	4.7/Va/Alp01
2-2	Heinrich August Jäschke	A Tibetan-English dictionary with special reference to the prevailing dialects	Kegan Paul, Trench, Trübner, 1934	4.7/F4/J26
2-3	河口慧海	西藏文典	大東出版社, 1936	4.7/F/Ka92
3-1	—	影印北京版西藏大蔵経丹殊爾経疏修身部雑部一	西藏大蔵経研究会, 1957	4.7/D/C42/144
3-2	—	五体清文鑑 下冊	民族出版社, 1957	4/F/W96/1
4-1	—	漢蔵新詞彙 全4巻	民族出版社, 1954-57	—
4-2	—	漢蔵詞彙	民族出版社, 1964	4.7/F4/H29
4-3	毛沢東	毛沢東選集 第1巻	人民出版社, 1951	B/308/13/1
4-4	Ma'o tse dung	Ma'o tse dung gi gsung rtsom gces bdus(毛沢東選集) 1	民族出版社, 1967	—
4-5	Mdo mkhar ba Tshe ring dbang rgyal	Gzhon nu zla med kyi gtam rgyud (比類ない王子の物語)	西藏人民出版社, 1979	—
5-1	—	Dag yig gsar bsgrigs (新編蔵文字典)	青海民族出版社, 1979	4.7/F4/X3
5-2	青海民間文芸研究会 収集整理	Dzam gling ge sar rgyal po'i sgrung Hor gling g.yul 'gyed [stod cha] (ケサル王物語ホル・リン大戦 [上])	青海民族出版社, 1979	—
5-3	王歌行・左可国・劉宏亮 整理	嶺・格薩爾王 霍嶺戦争 [上]	中国民間文芸出版社, 1985	—
5-4	青海民族教材編訳処 編	五省区協作教材九年義務教育小学課本『語文』(試用本)第5冊	青海民族出版社, 1994	—
5-5	五省区蔵語文教材編 写組編	五省区協作教材九年義務教育小学課本『語文』(試用) 第1冊	西藏人民出版社, 2001	—
5-6	Grags pa (ed.)	Gangs rgyan na chung tshags par (子供新聞)	青海民族出版社	—
5-7	Don grub rgyal, 陳慶英 (trns.)	Thang yig gsar rnying las byung ba'i bod chen po'i srid lugs (新旧唐書に見られる大チベットの政治状況)	青海民族出版社, 1983	—
6-1	—	西藏文学	西藏文学編集部	雑中/C/2
6-2	—	Bod kyi rtsom rig sgyu rtsal (チベット文芸)	西藏文芸編集部	—
6-3	—	Sbrang char (ダンチャル)	青海民族出版社	—
6-4	Dpal 'byor	Gtsug g.yu (トルコ石の髪飾り)	西藏人民出版社, 1985	—
6-5	Don grub rgyal	Don grub rgyal gyi brtsams sgrung phyogs bsgrigs (トンドゥブジャ小説集)	民族出版社, 1997	—
7-1	William Shakespeare/ Brag gdong bkraas gling Dbang rdor (tr.)	Ro me'o dang ju likri (ロミオとジュリエット)	西藏人民出版社, 2003	—
7-2	Antoine de Saint- Exupéry/Sgar gear Kirti skyabs (tr.)	Rgyal sras gzhon nu (星の王子さま)	上海文芸出版社, 2016	—
7-3	ザンダワ・色波/牧田英 二訳	風馬の耀き—新しいチベット文学	JICC出版, 1991	A/9B-9/56/8
7-4	徐則臣・周嘉寧他/桑 島道夫編訳	9人の隣人たちの声	勉誠出版, 2013	A/9B-9/698205
7-5	阿来/山口守訳	空山 風と火のチベット	勉誠出版, 2014	A/ 9B-9/695536/1
7-6	トンドゥブジャ/チベット 文学研究会編訳	チベット文学の曙 ここにも激しく躍動する生きた心臓 がある	東京外国語大学ア ジア・アフリカ言語 文化研究所, 2012 (勉誠出版からも刊行)	A/9E3-8/D682
7-7	ペマ・ツェテン/星泉・大 川謙作訳	チベット文学の現在 ティマー・クンデンを探して	東京外国語大学ア ジア・アフリカ言語 文化研究所, 2013 (勉誠出版からも刊行)	A/9E3-8/P123
7-8	ラシャムジャ/星泉訳	チベット文学の新世代 雪を待つ	勉誠出版, 2015	A/9E3-8/L688
7-9	タクブンジャ/海老原志 穂・大川謙作・星泉・三 浦順子訳	物語の島アジア チベット ハバ犬を育てる話	東京外国語大学出 版会, 2015	A/9E3-8/S779